



追悼

「ロマンと現実感覚の調和のとれた人」—故 名誉会員 重田信一先生—

山崎 美貴子（神奈川県立保健福祉大学）

明治学院大学の遠藤興一先生から重田先生の危篤のお知らせを頂き、慌てて、大正大学の石川先生とご一緒に「中銀 ケアホテル横浜希望ヶ丘」に伺いました。娘さんの信栄さんから、「もう応答できないかもしれない」と伺っておりましたが、大きな声で私たちがお声かけさせて頂くと、いつものポーズで点滴の針を付けたまま右手を挙げて、苦しい呼吸の中で『やあ！会いたかったよ』と一言おっしゃってくださいました。これが先生とお話した最後のお声でした。院内で大腿骨骨折され、その手術にも耐え、ペースメーカーの不具合にも耐え抜き、昨年 11 月 26 日、11 時 47 分、二人のお孫さんの声掛けに右手を挙げて応え、静かに 101 歳と 1 か月のご生涯を閉じられたと伺いました。現在、東京の護国寺にある「西信寺」というお寺に眠るご両親のもとに帰られました。死因は肺炎とのことでしたが、全力で、すべての力を出し切って生き抜かれたと思いました。

2009 年 10 月 9 日、「白寿・社会福祉 75 年の集い」をさせていただき利子夫人とともにご出席され、100 名を超える出席者と「これが最後だよ」と言って、再会を楽しまれました。

昭和 8 年、東京市役所社会局調査課に書記として採用され、200 人もの調査員を抱え、大規模調査を実施されたようです。この研究が先生の研究の原点かとも思われます。大規模な失業者が街にあふれ、要保護者の発見、生計費の調査をされたと語っておられました、昭和 14 年に、牧 賢一先生のすすめにより、全社協の前身である中央社会事業協会の研究所の所員に採用され、(生前給与は 30 円？と語っておられた)、その時代の同僚であった天達忠雄先生、浦辺史先生との交流が始まり、生涯続くことになり、個性豊かな 3 人の先生のお話をよく聞かせていただきました。当時の研究所長の穂積重遠先生の命令で「アドミニステーション論」の教科書を書いたといっておられましたが、拝見したことはありませんでした。当時まとめられた「社会保健婦」という書物を頂きました。戦前、保健師活動と地域福祉の実践が一体的に地域で進められていたのに戦後、保健と福祉は制度の縦割りのより、別の領域として教育され、資格制度も異なってしまったことを嘆いておられたことを思い出します。戦後、市町村を含めて、社協活動の体系化に力を尽し、基本要綱の策定の為に全国を回って取りまとめられ、礎を築かれました。

昭和 37 年、教育に転じられ、明治学院大学、大正大学、さらに、横浜福祉専門学校を設立され、現場を支える人材の養成に生涯尽くされました。重田理論といわれる地域福祉の現場実践と理論の架橋的役割をもって体系化をはかられました。故吉田久一先生は「重田君はロマンと現実感覚の調和のとれた人」と語っておられました。はにかみ屋さんでありながら、いつも周りに気づかい、人間が大好きな人であったとしみじみと想いだされます。心からの感謝を以てご冥福を祈ります。